

[発表タイトル]

Mary is pretty to look at vs. Mary looks pretty: Property Cognition through Visual Information

[本文]

本発表の目的は、英語の連結的知覚構文(=(1))と Pretty 構文(=(2))の比較を通して、視覚に基づいて対象物の属性・性質を知覚するという認知的営みがいかんして二つの異なる構文形式に反映されているかを明らかにすることである。

(1) Mary is pretty to look at.

(2) Mary looks pretty.

この比較が意味を持つためには、(1)と(2)が共に、視覚に基づく属性認知を表す構文の事例であると見做されなくてはならない。この点で、(2)には特に問題はない。(2)が(3)のような構文スキーマの事例であるというのはごく自然な見方である。他方、(1)の文は、先行研究では常に述語となる形容詞(=pretty)が中心に捉えられ、to 不定詞句内の動詞(=look at)を基盤に分析されたことがない(Lasnik and Fiengo 1974)。即ち、構文文法(Croft 2001)の視点からすれば、暗黙のうちに形容詞基盤のスキーマ(=(4a))が想定されていた。

(3) [Subject look Adjective] → SLA 構文

(4) a. [Subject_i be pretty to VP φ_i] (形容詞基盤)

b. [Subject_i be Adjective to look at φ_i] (動詞基盤) → SBAL 構文

本発表では、従来のこの見方を 180 度転換し、動詞基盤の構文スキーマ(=(4b))を想定する。この想定は実態に即したものである。BNC や COCA 等のコーパスで事例を採集すると、Adjective のスロットを満たす形容詞の種類は非常に多岐に渡り、(4a)よりもはるかに高い生産性を示しているからである。この前提に基づき、本発表では、(3)と(4b)の構文の意味機能を比較し、視覚情報に関する概念構造がいかに二つの構文に反映されているかを明らかにする。(以下、前者を SLA 構文、後者を SBAL 構文と呼ぶ)

(3)と(4b)の意味機能の違いは、同じ形容詞を用いて対象の属性を描写しても言及する属性のレベルが明らかに食い違うケースに端的に現れる。(5a)では *easy* は本の内容の簡単さを描写していることになるが、(5b)では、本の見た目の良さを描写しているという解釈しか成り立たない。

(5) a. The book looks easy.

b. The book is easy to look at.

したがって、SBAL 構文は、(5a)のように対象の本質的な属性にまで切り込んでいく SLA 構文とは違って、「視覚のみで捉えられる、対象の表面上の属性」だけを描写することにその機能を特化しているといえる。

このような機能分担は、認知的な動機づけという観点から分析することが可能である。我々は視覚で得られる情報に関して、時と場合に応じて、一見矛盾したような態度を示すことがある。一方では、視覚は対象を捉えるのに最も容易に手に入る最も豊かな情報源であり、最も信頼に値する情報源である。しかしまた一方で、視覚に基づく情報というのは、数ある情報源の

うちの一つに過ぎないという面があるのも事実である。ある対象の属性を捉えるための情報源は、多くの場合、視覚以外にも多数存在する。さらに、この見方とも関連すると思われるが、視覚は時として我々を裏切るものと見做される場合もある。視覚に頼る限りは良い情報を得たのに、その実体は頗る酷いものであったという経験（あるいはその逆の経験）は、我々にとってごく日常的なものである。

本発表では、視覚の理想化認知モデル(cf. Lakoff 1987)を想定し、以上のような視覚に対する三つの捉え方を、同モデルを構成する三つの下位モデルとして、以下のように設定する。尚、この三つは互いに矛盾するものではなく、視覚情報を構成する性質のうち、どの部分により高い際立ちを与えるかの程度の違いによって分布している。

- (6) a. 信頼・優先モデル
- b. 部分モデル
- c. 裏切りモデル

以上の考察を踏まえ、本発表では、以下のように主張する。

- (7) a. SLA 構文の主たる機能は、信頼・優先モデルに動機づけられている。
- b. SBAL 構文の主たる機能は、部分モデルと裏切りモデルに動機づけられている。

(7)の主張の根拠として、作例および BNC からの実例を挙げる。買い物をしている状況で(8a)のように言うと、*good* で表された認識が、購買という目下の目的に本質的に直結したものであることが伝達できる。SLA が信頼・優先モデルに動機づけられているからである。一方、(8b)では、「見た感じは良い。しかし、それ以外の点は芳しくない」という含意が強く出る。この含意は、この構文が視覚に関する裏切りモデルに動機づけられたものであることを示しており、現に(9)のように、実際に前後の文脈で明示されることも多い。

- (8) a. That looks good.
- b. That is good to look at.

- (9) And though **the cottage was pretty to look at**, it was rather poky inside with small, dark rooms and low ceilings. (BNC; 太字は筆者)

部分モデルに動機づけられた SBAL 構文の事例としては、(10)のように、同一の対象物に関して複数の属性を列挙し、視覚に基づく属性を表す述語はその複数の属性の一つに数えられているような場合が典型的である。

- (10) Terracotta tiles, brick, flagstone, slate, terrazzo and non-slip ceramic are all durable, impressive, **good to look at** and easy to clean. (BNC; 太字は筆者)

以上のように、本発表は、SBAL 構文を、SLA と同様に視覚構文の一つとして位置付けることの意義を論じ、視覚の理想認知モデルが二つの構文を動機づけることを明らかにした。本発表で指摘する SBAL と SLA の機能的な相違は、前者が事象叙述、後者が属性叙述に傾斜したものであるとすると、叙述類型論(益岡 2008)に対しても興味深い知見を提供することが期待される。

[主要参考文献]

- Asakawa, Teruo and Koichi Miyakoshi (1996) “A Dynamic Approach to *Tough* Constructions in English and Japanese,” in Akira Ikeya (ed.), *Tough Constructions in English and Japanese: Approaches from Current Linguistic Theories*, 113–149, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Bolinger, Dwight (1961) “Syntactic Blends and Other Matters,” *Language* 37, 366–381.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- 河野継代 (1984) 「英語の *Pretty* 構文について」, 『言語』 第 13 卷 4 号, 108–116.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo (1974) “Complement Object Deletion,” *Linguistic Inquiry* 5, 535–571.
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』 くろしお出版, 東京.
- 坂本真樹 (2003) 「生態学的知覚論, 心の理論, 属性描写文の認知意味論」 山梨正明(編) 『認知言語学論考』, 157–197, ひつじ書房, 東京.
- Schachter, Paul (1981) “Lovely To Look At,” *Linguistic Analysis* 8, 431–448.
- Taniguchi, Kazumi (1997) “On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective,” *English Linguistics* 14, 270–299.
- Yonekura, Yoko (2004) “Strategies in the Categorization of *Tough* Constructions,” in Yukio Oba et al. (eds.), *Kotoba no Karakuri (The Mechanism of Language); Festschrift for Professor Seisaku Kawakami on the Occasion of His Retirement*, 453–468, Eihosha, Tokyo.

コーパス

British National Corpus (<http://corpus.byu.edu/bnc/>) [BNC] (※BYU-BNC)

Corpus of Contemporary American English (<http://www.americancorpus.org/>) [COCA]